ぶらり瓢箪
わしが釜に来たころ

わしが釜にきたのは昭和三十七年。南京虫がいたので七月頃か。

朝の求人の場所は新今宮駅の西の尼ヶ崎平野筋で、大国町の方に行く交差点の一角にいまでも空地になっているところがある。当時そこは森のように木が多く、バラックが一軒あった。それが労働者相談所で求人り受けをしていた。

人の話によるとその前は露店であったが、釜ヶ崎事件で露店交差点が大荒れに荒れたのでこちらにきたという。

宿舎は神屋である。数人の労務者が燃えている焚用車を露店交差点から北崎町交差点まで押す。多数の労務者はワッショイ〜とかけ声をかけながらついてくる。交差点で押してきて交差点に横倒しにすると歓声がどよめく。大きな声でいえないがすばらしいことですね。話をきいただけでも心が踊る。ワクワクする。

分宿はその釜ヶ崎事件で大阪府労働部があわてて設置したものである。

求人の条件はいまのように紙に書かず木製のプラカードにチョークで書いていた。若い手配師はかっこう良さにそれを持つのをいやがっていた。

日当は千円前後で七五〇円もあった。（マンガ参照）

仕事は土方と本船が主でその他に、材木のかつぎ屋、ゴミ屋、鉄屑がつぎもあった。

塚乃専門の畳山組でもいまのように重機でなく、地下三階の大工事でも手掘りであった。土方が五十人ぐらい一列にならんで掘っていた。

生コンのガード押しであったが午前中の仕事も多かった。日当は八割ぐらい出すのでセメント専門の労務者もいた。

現場に行って朝からトンコすると命がけであった。なぐられることもあると、単車で追っかけてくることもあった。本船でトンコした労務者がなぐられるのがいやさに、岸壁まで泳いだ話もきくがウソとは思えない。

一年前であったか、読売新聞の記者に「釜ヶ崎は前かららくらべて前進したことがありますか」ときかれたことがある。「現場でなぐられることが前よりなくなった」「そんなことは前進にならん」という。

＊　＊　＊

作家の黒岩重吾が三年前であったか、朝日新聞の夕刊に釜ヶ崎のことを書いていた。釜ヶ崎の酒屋で焼酎をくれといわずに、バクダンをくれというと、労務者が振り向いて恐い目付でにらんだという。その目付をこれでも人間の目か」と書き、「釜ヶ崎だけに人間性を求めるのはおこがましい」とも書いていた。

昭和三十七年頃の労務者は詩人のようにのんびりしていた。物静かで、しのぎ、たかりの言葉さえなく親切な労

務者もるくいた。金がない時に飯屋で飯にしょうゆをかけて食っていると、知らん労務者がおかずをおごってくれたことがある。日当の半分ぐらいはなくなっていた時代。いまの労務者は女の話さえ少ない。それは黒用力長時か。そういうわしもそうだが。かっこう悪。

その頃の労務者のケンカの相手は手配師か悪徳商人に決まっていた。警官と取組み合いをするたくましい労務者もいた。いまのように労務者同士のケンカは見たことがなかった。

＊　＊　＊

話は変るがいまから何年前であったか、釜ヶ崎の手配師のことでブックス言うたれ。大阪府庁に行き、知事に面会を求めたことがある。後で新聞で気が付いたが知事は東京にいって不在であった。

知事の秘書が出てきて「いつも送ってくる〝漫画〟で見る釜ヶ崎〟は知事も見ています」という。ほんまかいな。「今日は知事が不在のため鎌田副知事と会わすので一寸待って下さい」と云っていたが、労働部の役人が三人も出てきてびやまをしてそれさえ実現しなかった。

労働部は知事に釜ヶ崎のことをどう報告しているのか、うソがばれることを恐れて鎌田副知事にさえ会わすことをびやましたのか。どたいぜ労働部のオッサン。腹が立つ。

＊　＊　＊

話は前後するが、二〇〇〇年労働福祉センターは昭和三十七年に設立されている。設立というとすごく役に立つよ

だがどうでもない。

設立当時の役員は大林組、近畿組の社長の他に文化人知識人といわれる人もいた。作家の藤沢恒夫、評論家の村山リュウそいたが一年でトンコ。大学の学長等もいたがこれもトンコ。給料がせぎの集団にいや気がさしたかもしれないが。

＊　＊　＊

十年ひと昔というが昔の入浴温泉は天下太平の洗だく場であった。（マンガ参照）地下タビでも作家者の上下なんでも自由に洗えた。「洗だく板」のはり紙は出ていたが役に立っていなかった。洗だく板を持込むオカマもいた。どんな汚れのパンツでもフロ屋で洗うと美しくなるのでありがたい。番台では「バケツを持ってくれば水で洗ってやるので」とはいっていたが、そんな面倒なことはこちらがお断りであった。その頃の貸タオルは五円であったと思う。それでもっ金がない時、というとタダで貸していた。

フロ屋の風景は昔と変った。昭和四八年十一月二四日付朝日新聞「今週の声」に、「ふろ屋に行くと貸しタオル値上げのはり紙がされていた。昔とちがって湯に入りながら浜田や美空ひばりの歌をきかされないばかりか、話声すら聞かなくなった。番台の親父は田中角栄で通常温泉のような気がした。」「短い坊主の主は世の中から捨てられ、りん地区に住むくんか。番台の親父に見たてられた田中角栄はこのところ、こきおろされてばかり」という新聞記事出ていた。（わしの投書や）